



平成28年度

事務所だより 第7号

平成29年 3月8日
益田教育事務所

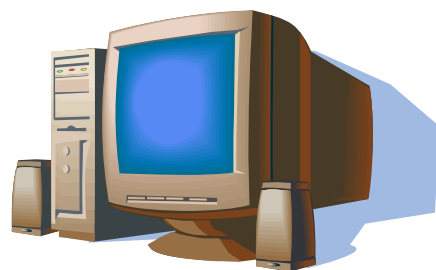


30年後を見据えて思うこと・・・。

益田教育事務所 岡本昌浩

今、私の手元に一冊の赤茶けた古い雑誌が置かれています。題名は『教育科学「社会科教育」1985年11月号』。今から32年前、私が教員になった年に買ったものです。先日、部屋の片づけをしたときに偶然見つけ、思わず読み返しました。今から30年前にどんな未来予測がなされ、どのような教育をしようとしていたかを知りたいと思ったからです。

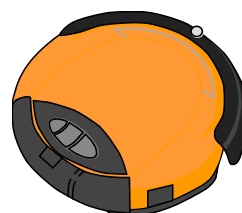
雑誌のテーマは「ニューメディアとこれからの授業像」。1985年といえばバブル景気を前にして、コンピューターによる自動化が広まりつつあったいわゆる「第3次産業革命」の時代でした。巻頭言をかざった国立教育研究所名誉所員（当時）の大野連太郎氏は、教室にパソコンを備えていつでも情報を取り出せる授業をすることで自己学習力を育てることが大切であるとし、パソコンでつくったゲーム教材やシミュレーション教材を活用した「パソコンとの対話」について期待をこめて書いています。30年後の今となつては、当時ほとんどなかったインターネットをはじめ、ICTを活用した授業が多くの学校で行われ、その便利さゆえの課題もあることが明らかになってきました。まさに隔世の感があります。



それでは、30年後の未来をイメージしたとき、今どんな教育が必要なのでしょう。その手がかりが平成28年12月21日に公開された次期学習指導要領の答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」）です。この答申は次期学習指導要領の「理念」に相当します。

答申では、次期学習指導要領は「東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年から、その10年後の2030年頃までの間、子供たちの学びを支える重要な役割を担う」と位置づけます。

また、『第4次産業革命』ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、



A I 家電のさきがけ、ロボット掃除機

社会や生活を大きく変えていくとの予測」のもと、情報技術の負の側面にも目を向けています。実際に、2045年にはコンピューターの能力が人類を越えることで様々な問題が起きると警鐘を鳴らす研究者もいるなど、30年前のようなコンピューターの進化に対する期待感が大きく膨らんでいる状況とは異なっています。

こうした状況を踏まえて、答申では「人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる」として、人間ならではの学習の意義を強調します。(※下線部は筆者による加筆 以下同様)

そして、これからの学習では「目的に応じて必要な情報を見だし、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさわしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたり」することが大切であると述べています。



まさに、パーソナルコンピュータの父といわれ、教育者でもあるアラン・ケイ(Alan Key)氏が指摘した「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」という言葉が具現化しているかのようです。また、こうした考え方が改訂の柱である「主体的・対話的で深い学び」にもつながっているように思います。

以上のような改訂の「理念」についての理解は、改訂の「内容」の理解と同じくらいに重要です。この2つの理解がなければ、これから始まる改訂に対して、やらされ感ばかりが募ることでしょう。私たちは常に、何が不易で何が流行なのかじっくりと見詰め直すことが必要なのかもしれません。

先ほどの雑誌の連載に、「若い教師のために」として岡山大学教育学部附属小学校(当時)の家光大蔵氏がこう書いています。授業で大切なのは「学習問題が子どもの問題意識の中でつながっている(*)」ことだと。まだ若かった私はこの箇所を線を引いています。今もって変わらぬ自分への課題として追いつけている毎日です。

(*) 教育科学「社会科教育」 1985年11月号 「若い教師のために」 家光大蔵 より抜粋

「特別の教科 道徳」への対応は進んでいますか？

次期学習指導要領の改訂に先駆けて、小学校は平成30年度から、中学校は平成31年度から、道徳が「特別の教科 道徳」に変わります。「評価をどうするのか」などが話題にあげられていますが、「考え、議論する」道徳を目指した、質の高い授業をすることが求められています。

学校全体で取り組む体制づくりや、内容項目の追加・変更に伴う全体計画(別葉も含む)・年間指導計画の見直しなど、できる準備を進めておきましょう。

『遊びの力』と『遊ぶ力』

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 大島功央

◎場面 1

林業の振興や木材を上手に使うことを啓発するイベントでの一場面です。会場の一角に、製材をした後の端材を加工した積み木が置いてあるコーナーがありました。そこにいた4歳ぐらいの女の子。私が3つの積み木を重ねて置くと、その隣にも同じように3つ重ねた積み木を置きました。表情は、真剣そのもの。わき目も振らず規則正しく同じパターンで積み木を並べていきました。

◎場面 2

津和野町の枕瀬山に、「友好の森」という広場があります。ここでの野外活動でのことです。当日は、火おこしをしたり、飯ごうでご飯を炊いたりといろいろなプログラムを準備していました。しかし、その日一番印象に残ったのは、「始めるよ！集まって！」と声をかけるまでの子どもたちの姿でした。勝手気ままに、広場の中で走り回ったり、虫を見つけたりしている子どもたちは、嬉々としていてとても楽しそうでした。



場面1のように、子どもがおもちゃを使って遊ぶことは、手を動かすことによって脳を刺激し、発達を促します。また、「物と物」や「人と物」の関係を認知したり、自分の周りの世界を知ったりする上でもとても重要です。

また、場面2では、ゲームやスマホでの遊びばかりというように見られがちな今の子どもたちですが、大人から与えられた遊び道具がなくても、何もないなら、それなりに自分たちで遊びを開発する子どもの姿が見てとれます。何もなくても、ただ走り回っていることが楽しいというのが子どもたちの本来の姿なのだと思います。

いずれの場面でも、大切なのは、しっかりと遊ぶための時間を子どもたちに保障するというではないでしょうか。遊びに没頭し、自分の世界に浸る。時間を忘れて仲間とじゃれあい、くたびれ果てるまで走り回る。こうした「遊びの力」が子どもたちの心と身体を育み、世界を広げていくのです。

先日、公民館主催の親子で遊ぶ活動に講師としてお招きいただきました。はじめの会で、子どもたちとは「しっかり遊んで楽しみましょう！」、保護者の皆さんとは「この2時間は、子どもたちを急かさなさい。大げがをしそうなき、他の人にけがをさせそうなき以外は、叱らないでください。」と約束しました。その日の活動は、親子ともはちきれんばかりの笑顔と笑い声があふれていました。素敵な時間を一緒に過ごさせていただき、とても幸せな気持ちになりました。

忙しく慌ただしい毎日ですが、ふっと力を抜いて、子どもたちの遊ぶ姿をじっくりと眺めてみませんか。子どもの持つ「遊ぶ力」に驚かされるかもしれませんよ。

特別支援教育情報

益田市教育委員会 派遣指導主事 小石伸江

特別支援教育を推進するための“タネ”にしていただけたらと思いつながりの情報提供です。

「高等学校における通級による指導」の導入に向けた動き

2017年度

- 指導内容の普及
 - ・㊦「指導の手引き」改定
- 条件整備
 - ・㊦㊧中核的教員の育成研修
 - ・㊧実施校の決定

2018年度

- 制度の運用開始
- 継続的なフォローアップ
 - ・㊦「指導の手引き」の周知
 - ・㊦㊧中核的教員による普及
 - ・㊦㊧通級指導担当教員の育成研修

2019年度

2020年度

国の報告の中に、「対象となる障がい種は、小中学校における通級による指導の対象と同一とすることが適当」「中学校からの迅速な引き継ぎ・連携体制の構築に努める」とあります。

2017年1月14日 NISE 国際シンポジウム（於：一橋大学一橋講堂）

[プレイベント]

障がいの理解啓発に使える資料、ICT機器の展示等がありました。



ビニール手袋や軍手をはめて細かな作業をすることで、指先の動かしにくさを疑似体験できます。

[シンポジウム]

- シンポジスト
 - Constance McGrath(米国：小学校教師)
 - Yvonne Griffiths(英国：大学教育学部准教授)
 - 冢田三枝子(横浜市立斎藤分小学校長)
- 報告や意見交換の内容
 - ・米国では**チームメンバー**（作業療法士、言語療法士、教師等）が協力し指導者自身が無理のないペースで教育を進めている。
 - ・英国では**読み書き障がいのある子どもへの支援が制度的に進められている。**
 - ・特別な支援を全ての子どもに開放することで**当たり前のこと**になる。～子ども自身の“支援”に対する拒否感や劣等感が弱まる。
 - ・知識技能を**仲間と共有**して教育に当たることで教員の専門性が高まる。

益田市教育委員会の各種資料 貸出しますので、学校教育課までご連絡ください。

- ・心理検査器具（WISC-Ⅲ…高津小据置、WISC-Ⅳ…吉田小据置、WAVES…吉田小据置）
- ・DVD「発達障害等に関する専門性向上ガイド」小中学校（1巻）、高等学校（2巻）
- ・映像ディスク「発達障害教育情報センター 研修講義 ver.4」スポーツ庁
- ・DVD「幼児期の運動に関する指導参考資料 第二集」独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
- ・映像ディスク「読み書きが困難な子どもの『読み書きしたい!』を支える」松尾由美子
- ・CD「サンプル版音声教材」（マルチメディアデジタイズ教科書、音声教材 BEAM、DOCX 及び EPUB による音声教材）

算数授業改善推進校事業

～吉田小学校の取組について～

益田教育事務所 村上 剛

今年度から平成30年度まで、「算数が好きだ」という子どもを増やすことをねらいに、算数授業改善推進校事業の取組がなされています。益田教育事務所管内では、益田市立吉田小学校が推進校となっており、「子どもの声でつくる算数授業」に学校をあげて取り組んでいます。

「子どもの声でつくる算数授業」とは

- ◆子どもが「算数の勉強が好きだ」「問題を解いてみたい」と思う授業
- ◆お互いの考えを伝え合うなど、それぞれの考えが深まっていく全員参加の授業
- ◆子どもが考えること、やりきることを楽しむ授業 (島根県教育委員会)

吉田小学校では、今年度、以下のような研究主題・めざす児童像の実現のために、3つの視点で研究を進めてきました。

研究主題 「かかわり」とおして考えることを楽しむ授業づくり

＜めざす児童像＞

- ・目的意識をもって取り組む子
- ・学んだことを進んで使う子
- ・自分や友達によさに気付く子



2年生「はこの形」
色板を組み合わせて、箱を作る様子(2/8 校内研修)
※県教委等に公開

＜研究の視点＞

- 1 指導者自身が「かかわり」とおして「算数の楽しさ」や「よさ」を実感する
- 2 実践とおして「わくわく授業」を創る
☆児童の思考の流れを大切に学習を創る
☆児童が自分の変容を実感する学習を創る
- 3 学習の基盤となる指導者と児童、児童と児童の豊かな「かかわり」を創る

研究授業や教科書比較などの校内研修を重ね、児童の思考の流れを大切に、児童が自分の変容を実感するためには、「めあて」が大切であるということにたどり着き、研修を深めていきました。

算数の授業について職員室で話し合う機会が増え、指導者の意識の盛り上がりが見られるようになり、「算数が楽しい」という児童が増えてきています。

また、学級の基盤づくり(かかわりづくり)は算数に限らず大切であることから、今後も授業リーダー教員から学んでいきたいと意欲的に取り組んでいます。



ペアで考える
場面に、指導者が
「かかわる」



活動したい手を止め、友達の考えに耳を傾ける
すてきな「かかわり」が見られました

2月14日には、益田市教研算数・数学部会研修会とタイアップして公開授業が行われ、小学校だけでなく、中学校からもたくさんの先生方に参加していただき、研修を深めました。

来年度も吉田小学校には公開授業をしていただきます。できる限りご参加いただき、お互いの授業改善に生かしていただきたいと思います。

学校間、校種間を問わず連携を深め、「算数・数学が好き」という子どもたちをもっと育てていきましょう。益田教育事務所もサポートいたします。